



江戸新撰三十三観音霊場巡り第3回目、旧東海道品川宿の巡礼

日本初の鉄道駅は品川と横浜停車場でした、
明治5年5月仮開通の品川駅、同年9月開業



「高輪ゲートウェイ」新駅開業工事中に
発見された明治期の鉄道石垣堤の遺構。



獄門首、場所不明
撮影は観光外国人

八ツ山跨線橋

花海道水辺公園
勝島運河鮫洲橋の遠景
左岸の橋先は鮫洲運転
免許試験場、京浜運河
先は JR 東海八潮新幹
線車両基地です。



昭和
新撰
江戸三十三親音霊場
品川宿をめぐる。

目次

京浜急行電鉄歴史、公使館焼討	1
土佐藩下屋敷跡、立会川汨橋、	2
番外 海雲寺、	3
三十一番品川寺、青物横丁、	4
旧東海道と目黒川、	5
荏原神社、三十番一心寺、	6
品川神社、御殿山庭園跡、	
品川船留まり、	7
青物横丁と埼玉県三郷の関係	8
裏表紙 コースマップ	



上図①

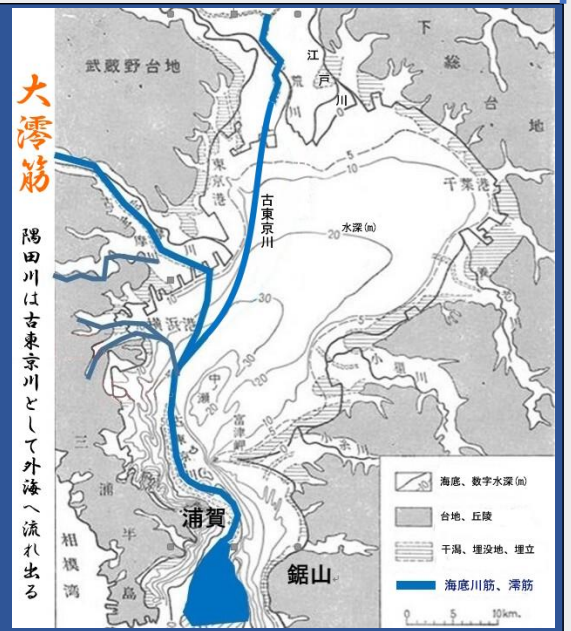
→ 図③

👉 図②

この地図の見方

南北に長い地図のため3ブロックに分けてあります。
 地図① 京浜急行立会川駅スタート - 浜川橋
 地図② 鮫洲 - 海晏寺 - 青物横丁 - 旧東海道
 地図③ 目黒川 - 品川浦 - 品川駅港南口到着
 各地図は、①から②③と北上します。

隅田川の延長上の東京湾には、湍筋である本湍(ほんみお)が流れています。
 東京湾干潟の川筋が大型船舶の交通を可能とし、現在は古東京川といわれ大都市の発展に見えない所で役立っています。



京浜急行電鉄の誕生

明治32年1月、多摩川に架かる六郷橋(現六郷土手駅)から川崎大師の2百間に、営業用電車が走る。開通時は「大師電気鉄道」で開業しましたが、直後に「京浜電気鉄道」と改名されています。

更に二年後、東京市電に乗り入れ高輪から雑色迄と六郷から神奈川間が延伸したが、国鉄との連絡を憂慮して品川駅始発とされました。



かっぱ祭り 神輿をお台場まで船で運び行われる。

8頁に詳細説明があります、ご参照ください。

文久2年(1862)12月12日深夜1時頃、伊藤博文は持ってきたのこぎりで柵を切り侵入、焼き玉、焼夷弾(しよういだん)を使って英国公使館を全焼させた。

「あの頃はああでなけりゃならんかったのだ！」

なぜ若い頃は攘夷論者(じょういろんしゃ)だったのか、と尋ねた相手を明治政府の実力者井上馨(かおる)は怒鳴りつけたと言います。

「攘夷」とは幕末の日本に広まった考え方で、「外国人を攻撃して追い出してしまえ」という激しいもの、日本を威圧しながら強引に開国させた諸外国に対し日本初の英国公使館になった高輪の東禅寺は二度も襲撃されました。【注】尊王攘夷⇨幕府寄り。

イギリス人達に安全な場所を求められた幕府は、北品川の御殿山に公使館の建設を許可します。

当時、聞多(もんだ)と名乗っていた井上は攘夷派の、伊藤博文や高杉晋作等とともに建設中の英国公使館を焼き討ちにする計画を立てます。事前の打ち合わせ場所は芝浦の日本初ビールがメニューにあったという妓楼「海月楼」でした。

公使館を全焼させた後、井上は前日に酒宴を催していた品川の「土蔵相模」という旅館屋に戻り、伊藤らは「海月楼」に逃げ帰って、燃えさかる御殿山を見ながらどんちゃん騒ぎをしていたそうです。

しかし、この様な大事件まで起こしたのですが、井上と伊藤は、ロンドンに留学して西洋文化を見分し、外国に学ばねば日本の未来は西洋に奪われ、中国の様に占領される、と一転して開国を推進します。

若い頃は攘夷派、後に開国派に転換したのも「国を思つてのこと」だと思いが井上馨にあったため、質問者を怒鳴りつけたのでした。



江戸新撰三十三観音霊場巡り、第三回目

旧東海道品川宿の霊場、立会川・品川駅

集合場所、JR品川駅京急連絡改札口前。

京浜急行立会川駅へ移動。全行程徒歩距離 5.8km

立会川

目黒区と品川区を流れ、勝島運河に流れ出る総延長 7.4km の二級河川です。名前の由来に定説はなく、「太刀会川」説、「中延の滝間(たきあい)を流れていたので滝間川」が変化した説。

更に、鈴ヶ森刑場へ送られる罪人を、その親族や関係者が最後に見送る「立ち会う」場所であったことから「立会川」と言う説があります。

品川区立北浜川児童遊園に、坂本龍馬のブロンズ像が佇んでいます。この像は2代目になります。

坂本龍馬は、嘉永六年(1853)に臨時御用として品川藩邸警衛にあたったようで書簡が残っています。

この地の土佐藩下屋敷から、北辰一刀流の桶町道場(現八重洲)へ通っていたのでしょう。

土佐藩下屋敷、藩主山内土佐守豊信 24万2千石。

京浜急行立会川駅の周りは、江戸時代、土佐藩山内容堂邸江戸下屋敷が第一京浜国道15号線と浜川中学校全域に在っていて、その広さは幕府から公給された屋敷の他に、自費で調達した分も含めると一万六八九一坪だったとのこと。

更に、立会川河口付近には、荷揚げ場として別途屋敷を構えていたと云い、鮫洲抱屋敷(さめずかかえやしき)と言った様です。

時期が、ペリー来航時であり。土佐藩主山内容堂

は屋敷内に砲台を備え、坂本龍馬も砲台の警護にあたりました。己を鯨海酔侯(げいかいすいこう)という。

立会川駅近くの坂本龍馬の銅像は、二十歳頃の龍馬が沿岸警備にあたっていた姿を写したそうです。

立会川汨橋と鈴ヶ森処刑場

荒川区南千住の小塚原刑場跡近くにあります、思川(おもいがわ)と同じく。品川区南大井の鈴ヶ森刑場跡近くの立会川にも汨橋がかかっています。

現在では橋名称が「浜川橋」に変わっています。

旧東海道「汨橋」の由来は江戸時代、小塚原と鈴ヶ森は処刑場として礫(はりつけ)、火焙り等の処刑が行われた場所であり、小伝馬牢内の留置された犯罪者は、此処迄運ばれてから処刑されました。

鈴ヶ森刑場は、汨橋から東海道を 700m 程下った海岸沿いのさびれた森でしたが、処刑者が鈴ヶ森刑場に向かうには、此の汨橋を渡ります。

汨橋は、罪人にとってはこの世の見納めのあると同時に、家族や身内の者にとっては処刑される者との今生の別れの場所であり、互いがこの橋の上で涙を流したことから汨橋と云われてきました。

鈴ヶ森刑場跡 (参拝外)

大森海岸駅から徒歩 10 分の処、この付近は海岸線の近くにあった1本の老松にちなんで「一本松」と呼ばれていましたが、この近くにある鈴ヶ森八幡、現磐井神社の社に、振ったりすると音がする酸化鉄の一種である鈴石があったため、いつの頃からか「鈴ヶ森」と呼ばれるようになったといえます。

また他説に、刑場が設けられる以前の慶長5年(1600)、関ヶ原に向かう徳川家康に庄司甚右衛門が目通りした際に、鈴ヶ森八幡近辺で陰間茶屋(かげまぢや)江戸時代中期元禄(1688~1704)年間頃に成立していた陰間(かげま)男が売春をする居酒屋や料理屋等を設けて徳川軍一行をもてなし、暖簾(のれん)の端に鈴を結び付けて出入りの時に鳴るようにした。という事で、森に響く鈴の音から、鈴ヶ森と呼ばれたともいわれています。

慶長20年(1615)に、高輪大木戸近くに開設され、「隠れキリシタン」の大火刑で知られる芝高輪刑場、札ノ辻の芝口門に作られた芝口札ノ辻刑場が、手狭になったため、慶安4年(1651)に開設されました。元禄8年(1695)に測量された検地では、間口四十四間(44m)、奥行九間(9.2m)でした。

明治4年(1871)に閉鎖される、200年間に十万人から二十万人もの罪人が処刑されたと言われていますが、はっきりした記録は残されていません。

江戸湾沿いの浜であったため、刑場近くの海で水礫による処刑も行われたとの記録も残されている。

東海道沿いの、江戸の入り口とも言える場所にある刑場ですが、刑場設置当時は浪人が増加し、それにもない浪人による犯罪件数も急増していたことから、江戸に入る人達、特に浪人達に警告を与える意味でこの場所に設置したのだと考えられている。

最初の処刑者は江戸時代の反乱事件「慶安の変」の首謀者のひとり丸橋忠弥であるとされている。

反乱は密告によって未然に防がれ、忠弥は町奉行によって寝込みを襲われた際に死んだが、改めて礫

刑にされました。

平井権八、俗名白井権八、新吉原の三浦屋の遊女小紫と昵懇(じっこん)となるが、やがて困窮、辻斬りを犯し200人もの人を殺し金品を奪ったとされる。

自首するが処刑され、小紫も後追い自殺する。

天一坊、別称名改行は、江戸時代中期の山伏。源氏坊 天一とも。将軍徳川吉宗の御落胤(らくいん)私生児、落とし子を称したが町奉行により処刑。

八百屋於七、恋人に会いたい一心で江戸大火にする放火事件を起こし火刑に処された少女お七。

といった人物がここで処刑されています。

隠れキリシタンの処刑も行われていました。

キリシタンは火刑であったとか…。

浜川砲台と勝島運河

2015年に復元された「浜川砲台の大砲」は、嘉永六年(1853)に開国を迫ったペリー提督が国書を幕府に渡すと、来春の再来航を約束して日本を去りました。その翌年の嘉永七年にペリー艦隊が再来航した際に土佐藩が造ったのが「浜川砲台」です。

「浜川砲台の大砲」は、この砲台に据えられた8門の大砲のうちの1つ「30ポンド六貫目ホーイツル砲」を原寸大の全長3m、車輪直径1.8mで再現したものです。

勝島は人工の島で勝島運河は昭和18年に出来た運河で、昭和25年に東京大井競馬場が出来ました。

大井公園脇のくらやみ坂は旧仙台坂(品川)という。

品川区の「旧仙台坂」は、現在「くらやみ坂」と

呼ばれており、海晏寺と泊船寺との間にある坂を指します。その後、交通量が増加してからは、池上通りを仙台坂と呼ぶようになりました。

池上通りの青物横丁交差点から仙台坂上交差点までの間を「仙台坂」、東京都道420号鮫洲大山線の南品川三丁目交差点から仙台坂上交差点までの間を「旧仙台坂、くらやみ坂」と呼ばれて。同じ道路でも名称が変わります。

暗闇坂は国道15号第一京浜南品川交差点から大井町方面へ登る坂で、坂上で現在の仙台坂、池上通りに合流している。坂の左右中程から上に仙台藩伊達陸奥守の下屋敷がありました。

仙台坂上には屋敷の味噌蔵を起源とする「仙台味噌醸造所」が昔ながらに残っており、現在も営業しています。坂の中程には屋敷跡の記しとして「たぶのき」も残されており、江戸時代の名残を偲ばせる。

山内容堂の墓がある大井公園

山内豊信(とよしげ)は容堂と号し、1888年第15代の土佐藩主となり人材を登用し藩政の刷新に努めた、国策についても議論し策を建てて多難な幕末期に大きな影響を与えたが進歩的で強力な言動は幕閣に恐れを抱かれ一時期、大井村の下屋敷に蟄居させられた。1862年再び政治の場に復し、大政奉還をはじめ幕府と朝廷の間の斡旋に力を尽くしました。明治5年に45歳の若さで亡。遺言による大井村の墓は「土まんじゅう型」の墳墓とされた。

墓碑表「贈従一位山内豊信公之墓」

裏「明治五年六月二十一日薨」

補陀落山海晏寺、曹洞宗

建長3年(1251)北条時頼による開基、

宋渡来の禅僧蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)の開山。御本尊は聖観音菩薩、本尊は、品川沖で網にかかった鮫の腹から出た物と伝えられ「鮫洲」地名の由来ともなっています。

江戸時代は「御殿山の桜」とならび紅葉の名所として知られていました。岩倉具視の墓があります。

開基は鎌倉幕府五代執権北条時頼で臨済宗。家康により曹洞宗に改宗。

海晏とは、水青く穏やかな海、天下泰平。

番外、龍吟山千躰荒神殿海雲寺、曹洞宗。

御本尊、十一面観世音菩薩、

ご真言 おん まかきやるにか そわか

荒神堂の千躰荒神王、

ご真言 おん けんばやけんばや そわか

おん あら はしやのう あきに

びぎやら うん そわか

ご詠歌、龍吟じ 品川の海におこり

み仏の慈悲 あるがたきかな

建長三年(1251)、僧不山(そうふざん)が近くの海晏寺(かいあんじ)内に建てた塔頭庵瑞林(あんずいりん)に始まると伝えられています。

当初、臨済宗に属していたが、慶長元年(1596)五世分外祖耕により海晏寺から独立して曹洞宗に改められ、寛文元年(1661)海雲寺に改名されました。

創立当時から安置されているという、仏師春日の作と伝えられる十一面観世音菩薩がご本尊なのですが、本堂隣に安置されている、「品川の荒神さん」として人々に親しまれてきた千躰三宝荒神像が有る。千躰三宝大荒神王とは、古来より火と水の神として、特にカマドの神、台所の神としても知られる日本独自に発展した仏教尊像の一つで、日本古来の荒魂に、古代インド神話に登場する夜叉神やアシウラ神の形態を取り入れて、様々な宗教要素が混交して成立したものとされています。

大火の多かった江戸時代の品川では、鎮火防火の神としても崇められたそう、現在ではカマド神として、3月と11月の27日28日の荒神祭では千躰荒神王が御開帳となり、護摩供養が行われます。

地蔵になった平蔵千體荒神堂(東京民話一声社)

万延元年(1860)、水戸と薩摩藩士により桜田門外で井伊直弼が襲撃された頃のお話です。

平蔵という正直者の乞食が仲間外れにされて凍死したという。

いまはむかし、東京が江戸といわれていた頃、平蔵という、正直者のこじきがいた。

こじきといっても、平蔵はいつも、人さまのおなさをもらって、生きるのがきらいだった。

平蔵が生まれた所は、東北の片田舎、貧しい百姓の家だった。おっかあと二人で、小作をして暮らしてあった。そのおっかあも死に、どうにもならなかったので、江戸に出てきた。江戸に来て、まともな仕事はなかった。

いつしか大木戸の近く車町のこじき宿に住むようになる。歳の瀬も迫ったある年のこと、その日は久しぶ

りに仕事があった。

鈴ヶ森の刑場で屍を土にうめる仕事だ。一日中、泥まみれになって、働いて六文もらった。

「もうじき、また、正月がやってくるけど、年をとるだけ人並みだ」平蔵はひとりごとをいいながら、品川の宿を越え、芝、高輪あたりまできて、一休みしようと、ふとあたりを見まわした。すると、ちょうど、腰かけるのに手ごろな枯れ木が横たわっていた。さて、しゃがみ込もうとすると、枯れ木のそばに何やら包みが落ちて

いるではないか。

「一体、何が入っているのだろう」手にとった包みはずっしりと重い。平蔵は、包みをといて、びっくりぎょう天。そのはずだ、包みの中には何と、大判、小判がびっしり入っている。「ああ、これだけあれば、いやな仕事もしないで暮らせる」一度は、そう思った平蔵、あの忘れもしない雪のふる夜、死ぬ間際にいった、おっかあ

あの声がかんて来た。

「平蔵、ここさすわれ、人間、一生かかっても、銭いくらあっても、買えん物があるぞ。そらな、正直という心だべな」平蔵は、一夜明けて、まだ星のあるうちに、こじきの宿を出ると、包みの落ちていた場所に座った。

やがて日が昇って、職人衆や旅商人があわただしく通るようになった。すると平蔵の前を、一人の武士が何か探しものでもしているかっこうで通りかかった。

平蔵は、立ちあがると、武士に呼びかけた。

「もうし、お武家さま、お金を落とされたのでは」平蔵の手には、しっかりと大判、小判の入った包みがにぎられていた。武士はとびあがらんばかりに驚き、目を喜びいっぱいにして輝かした。

「おめしがひろわれたか、かたじけない」武士は、包みの中から、小判を三枚つかむと、

「これを礼にとつて欲しい」と差し出した。ところが、平蔵は首を横にふって、なかなか受けとろうとしない。さんざん問答のすえ、ようやく、平蔵は小判を一枚だけもらった。

平蔵はその足で食べ物と酒を買い、こじき宿にもどると、仲間達にふるまい、今までの出来事を話した。酒の酔いがまわるにしたがい、仲間たちは平蔵をのしりはじめた。

「一生のうち、一度だっておがめねえ大金を、おめめと、落とし主に渡すとは、何たる馬鹿もんだ」

「そうだ、そうだ、放り出しちまえ」
その夜のうちに、宿から放り出された平蔵、あわれ、翌朝には、品川の海岸で、水死体となって発見された。平蔵の屍は品川の海雲寺に、ねんごろに葬られた。

お墓と並んで、地蔵が祀られ、今でも香華が絶えないという。

とある藩士が平蔵を悼んで建てた地蔵尊です。
明治33年(1900)10月京急本線建設に伴い、海晏寺から移されてきたものです。

第三十一番、海照山普門院品川寺

旧称、金華山普門院大円寺。真言宗醍醐派別格本山現在、しながわ寺と訓読みしないと通じない様です。

※ 寺院は意味がわかりにくい音読み、神社は訓読み。開山、開基、弘法大師空海、大同年間(806~810)に創建、後に開創、太田道灌公、長祿元年(1457)建立

中興開山、弘尊上人、寛文元年(1662)、
〔**ご本尊**〕、水月観世音菩薩、旅行中の安穩祈願。

形像は一定しないが、水辺の岩上に座し、
手に楊柳(ようりゅう)と瓶を持つ。

弘法大師由来、領主品川左京亮伝、

ご真言 おん はんどましりえい そわか。

おん びしゅだ はだま さたば けいた そわか。

聖観世音菩薩(太田道灌公の持念仏)

ご真言 おん あろりきや そわか、

ご詠歌、夕つぐる 鐘の響きに 帰りませ

救世の観音 ここにまします

寺伝によると、弘法大師空海を開山とし、大同年
間に創建されたという。長禄元年に江戸城を築いた
太田道灌により伽藍が建立され、大円寺と称した。

その後、戦乱により荒廃するが、承応元年(1652)
弘尊上人により再興、現在の寺号となりました。

大梵鐘(国指定重要美術品)、明暦3年(1657)9月
18日、京都三条大西五郎左衛門尉藤原村長の鑄造。

この鐘は江戸時代末期、いかなる理由によってか
海外に搬出されたまま行方不明になってしまいました
が、慶応3年(1867)パリの万国博覧会に出陳され、
ついで明治4年(1871)オーストリアのウィーンで開
かれた万国博覧会にも、多くの日本美術品とともに
展示されていたことが伝えられています。

梵鐘は、その後スイス国ジュネーブ市の名士ルビ
リオ氏の手元に保管され、同氏の遺言によって邸宅
と共にジュネーブ市に寄贈され「リアアナ美術館」
にて市民の友となりました。

品川寺先代順海和上は、梵鐘が海外に搬出された

ことを町の古老から聞き、大正年間を通して鐘を探
し求めた結果、大正8年(1919)その所在を求めるこ
とができました。そして、ジュネーブ名誉領事ケル
ン氏に書簡をしたため、大梵鐘の返還の願いを伝え
たのでした。

「日本の梵鐘は、時を告げると共に、人々がこの響
きを耳にする時、信仰を呼び起こし、心豊かな生活
を営む基調となっている。寺が鐘を鑄造するについ
ては、願いをこめ、多くの人々の寄進により造られ、
鑄造中は願いをこめ祈り、鑄造者は心身を清め、一
心不乱に名鐘を作り出そうと勤めます。」書簡はケル
ン氏を動かし、順海和上の願いは時の外務大臣幣原
喜重郎(しではらきじゅうろう)氏、スイス特別全権公使
の吉田伊三郎氏を通じ、ジュネーブの理解を得、昭
和4年(1929)10月15日ジュネーブ市議会は満場一
致の議決をもって、大梵鐘を品川寺へ贈還すること
を決定し、翌年おおよそ70年ぶりに戻ってきました。
境内には、徳川三將軍の号、東照宮、台徳院殿、
台献院殿と六観音、聖観音他、千手、十一面、准胝、
如意輪、馬頭の各観音を陽刻し、普門品一卷を陰刻
する。他に、江戸六地藏の第一番にあたる地藏菩薩
像や東海七福神の毘沙門天などがあります。

旧東海道品川宿

慶長6年(1601)に、中世以来の港町として栄えて
いた品川湊の近くに設置され、北宿、南宿、新宿に
分かれていました。

場所は、現在の東京都品川区内で、北は京急本線
の北品川駅から南は青物横丁駅周辺までの旧東海道

沿い一帯に広がっていました。

目黒川を境に、それより北が北品川宿、南が南品
川宿、北品川の北にあつた宿を歩行新宿(かちしんしゅ
く)とよみました。

歩行新宿は、品川宿と高輪の間に存在していた茶
屋町が享保7年(1722)に宿場としてみとめられたも
ので、宿場が本来負担する伝馬と歩行人足のうち、
歩行人足だけを負担したために「歩行人足だけを負
担する新しい宿場」という意味で名付けられました。
品川宿は五街道の中でも重要視された東海道の初
宿であり、西国へ通じる陸海両路の江戸の玄関口と
して賑わい、他の江戸四宿と比べて旅館の数や参
勤交代の大名通過の数が多かった様です。

鳳凰山天妙国寺、顕本法華宗(日蓮系)、**〔通〕**

ご本尊、三宝尊(さんぼうそん)、

法華宗、日蓮宗の本尊。仏、法、僧の三宝を祀る
寺伝によると、弘安8年(1286)、日蓮の弟子天目
が創建。妙国寺二世日叡(にちえい)の代に、顕本法華
宗の祖日什(にちじゅう)上人の門流に帰属した。

15世紀には品川湊の豪商鈴木道胤の寄進により
五重塔を含む七堂伽藍が建立された。

天正18年(1590)8月、徳川家康が江戸入府の前日
に天妙国寺を宿所としたことから、徳川將軍家との
所縁が生まれ、寺域や門前町が拝領地となった他、
最初の朱印状が交付された翌天正19年11月には十
石の寺領を寄進されました。

恭敬山長徳寺、時宗、**〔通〕**

ご本尊 阿弥陀如来、創建 寛正4年(1463)

開山 三寮覺阿弥陀佛(?)

「南品川のおえんさま」境内に閻魔堂があり、閻魔王坐像が安置されている。かつては旧暦の1月16日と7月16日は「地獄の釜のふたが開く日」とされ、多くの参詣者が訪れていました。

熊野山父母報恩院常行三昧寺、天台宗、通

ご本尊 阿弥陀如来、創建嘉祥元年(848)開山慈覚大師円仁、中興大永7年(1527)実海僧正。

目黒川と荏原(えばら)神社、勅宮社―郷社

都内では桜で有名な目黒川の河口です。

南品川の鎮守 勇壮な神輿の海中渡御「かっぱ祭」で有名な荏原神社の創立は和銅2年(709)9月9日で重陽節句日です、古くは貴船社、天王社、貴布禰大明神、品川大明神と呼ばれていました。現在の社殿は弘化元年(1844)に完成したものです。

祈雨と止雨の守護神とされる高龕神(たかおかみのかみ)をはじめ、天照大御神や須佐之男命などを祀っており、品川の龍神さまとして多くの信仰を集めてきました。荏原は旧住所名の荏原郷でした。

神殿に掲げる荏原神社の扁額は内大臣三条実美公、貴布禰大明神の扁額は徳川譜代大名源昌高のお染筆です。東海七福神の恵比寿神も祀っています。

6月上旬の例大祭では、海から拾い上げられたと伝えられる素戔鳴尊の神面を神輿につけて海上を渡る、勇壮な海中渡御が行われます。

「天王祭」と呼ばれ、かつては品川宿内の海岸から神輿を海に担ぎ入っていました、現在はお台場海浜公園周辺で実施されています。

11月の大鳥祭西の市、毎年1月後半〜2月上旬にかけて咲く寒緋桜の時期も多くの人出で賑わいます。

第三十番、豊盛山延命院 一心寺、いっしんじ

品川成田山不動尊、真言宗、

開基は、井伊直弼公 安政二年(1854)創建

御本尊、不動明王、

ご真言 なうまさんまんだばさらだんかん

聖観世音菩薩、ご真言 おん ありりきや そわか

ご詠歌は、ありません。

あれ、こゝろ? と、一瞬戸惑うほど小さなお寺です。

開国の機運が高まる幕末の安政2年、井伊直弼公が縁起となり、鎮護日本、開国条約、宿場町民の繁栄安泰を祈願して開山されたのが起源だそうです。

碑にある「大老就任は安政5年であるため」とありますが之は誤りです。

昭和の御代になって、成田山分身の不動明王を本尊としていたため、品川成田山と称されています。

一心寺のほうろく灸、毎月28日は一心寺の縁日で朝9時から夕方5時まで受け付けています。

ほうろく灸はお盆の迎え火やお供えに使用する素焼きの皿(ほうろく)を裏返しにして頭に載せその下に小さな赤い座布団をしき、混合した、もぐさ、みそ、にんにく、びわ、かき、どくだみ等の灸をすえる治療法です。

一心寺では昭和6年(1931)より七十余年の長い年月、多くの人たちに親しまれています。

中風除(脳の病気)、高低血圧症、頭痛症、かたこり、視力弱、めくらみを改善する効果があるといわれ、頭頂の百会(ひやくえ)に灸をすえることは理に適っているそ

うです。本堂で一同が頭から煙を出している姿は心和む光景だそうです。

万松山東海寺、臨濟宗大徳寺派 (立寄無)

創建年 寛永16年(1639)、開基 徳川家光

品川神社、(旧郷社)、

御祭神、天比理乃咩命 素盞雄命 宇賀之賣命

文治三年(1187)、後鳥羽天皇の御代源頼朝が海上交通安全と、祈願成就の守護神として、安房国の洲崎明神を勧請して、品川大明神と称し起源とされる。

元応元年(1319)後醍醐天皇の御代、当国守護職の二階堂羽入道道蘊が、宇賀之売命を勧請し社殿等を再建して社地を吉端岡(よしはがおか)と名付けた。

文明十年(1478)六月、太田道灌が素盞鳴尊を勧請し、現在の祭神となった。

慶長五年(1600)徳川家康が関ヶ原の戦いに出陣の折、当社神前にて戦勝を祈願し太々神楽を奏し、後に神輿、面等奉納。

寛永十四年(1637)將軍徳川家光の命により東海寺鎮守と定められ、建物の修復がすべて幕府によって賄われる幕府の御修復所となる。

同じく、北品川鎮座の荏原神社が南の天王社と呼ばれ品川神社の通称は北の天王社。

明治になって、天皇の勅使によって祭祀奉幣が行われる准勅祭(じゅん ちよくさい)社に定められた。

なお、准勅祭社の中の品川神社は当社のことではなく、荏原神社であるとする説もあるらしい。

『東京都神社史料第五輯』には、明治期の「御新政後記録」や「神祇官判事上申書」などが記載されて

います。

「御新政後記録」とは、品川神社第十三代神主小泉勝麿（小泉帯刀明治三年没）が明治元年より三年（准勅祭社制定年）までの諸通達、取調書意見具申書を記録したものです。

本殿の裏手から南側に、板垣退助の墓所がある。

「吾死スルトモ自由ハ死セン」という言葉で有名な明治の政治家。板垣退助の他にも幾つかの墓が並んでいるが、板垣家縁の墓だと思われます。

この墓の場所は、元は東海寺塔頭高源院の敷地でしたが、関東大震災後に高源院は移動され、この墓所だけが残されたらしい。

品川御殿跡の御殿山庭園

太田道灌の屋敷跡を徳川家光公他、歴代將軍の鷹狩休息所として、また幕府重臣を招いての茶会の場として利用された為、品川御殿と呼ばれ、品川湊の桜の名所として有名となりました。

しかし、元禄15年(1708)2月11日四ツ谷太宗寺付近の出火、御殿は焼失し8月14日廃されました。

開国後の文久元年(1861)、幕府は英国をはじめ諸外国の公使館を御殿山に建設することを計画したが、翌年12月12日、完成間近の英国公使館を高杉晋作、志道聞多(井上馨)伊藤博文等、尊皇攘夷派13名が襲撃し全焼した為に計画は頓挫します。

昭和22年には、前年に創業したソニーが本社を御殿山地区に移転。御殿山はソニーの「創業の地」とされ、ソニー本社一帯は「ソニー村」とも呼ばれました。その後ソニー本社は平成19年に品川駅港南に

移転し、ソニー通りだけが面影となりました。

鯨塚、利田(かがた)神社

寛政十年(1798)五月一日、前日からの暴風雨で品川沖に迷い込んだところを品川浦の漁師達によって捕らえられた鯨の供養碑です。

鯨の体長は九間一尺(約19.5m)高さ六尺八寸(約2m)の大鯨で、江戸中の評判となり、ついには11代將軍家斉が、現浜離宮恩賜庭園である浜御殿で上覧するという騒ぎになりました。

全国には、多くの鯨の墓、塚や塔、碑などが散在しますが、都内に現存する唯一の鯨碑、鯨塚です。

また、本碑にかかわる調査から品川浦のように捕鯨を行っていない地域での鯨捕獲の法を定めていることや、鯨見物に対する江戸庶民の喧騒ぶりを窺い知ることができる貴重な歴史資料でもあります。

品川浦船溜り

北品川の旧東海道品川宿の東側に北品川橋と屋形船や釣り船などが係留されている舟だまりがあります。この付近の江戸時代は完全に海で、漁師町だったようです。旧東海道品川宿は海沿いを通る街道でした。親柱に大正14年9月竣工とあります。

橋から眺めると、手前に屋形船や釣り船、奥には品川駅前の高層ビル群、品川インターシティが立ち並びます。ベンチなどもあり海拔1m程度の低地ですが都指定「しながわ百景」景勝地の様です。

八ツ山橋(跨線橋)、

東海道線発祥時、汐留を出発した機関車は海上を

走り八ツ橋、六郷、川崎、横浜を九時間程で走りました。なぜ、汽車は海上を走ったのでしょうか。

その裏には鉄道をめぐる明治新政府内の対立と、火の粉をまき散らす、江戸っ子にとっては最も厄介な火災が酷く懸念され嫌われたからでした。

鉄道建設の推進者は、イギリスに渡って蒸気機関車を目の当たりにした大隈重信ら「開明派」と呼ばれた人々で、大隈等は近代化の重要性を世間に知らせるため、人や物を早く大量に運べる鉄道は日本の発展に不可欠だと主張していました。

一方、旧薩摩藩の西郷隆盛等は、鉄道開設よりも軍備拡張が大事という立場でした。両者は対立し、西郷の影響下にあった旧薩摩藩邸や兵部省は鉄道用地の提供に難色を示しました。

「海上の堤防上を通す」城壁の石垣や神田川などの人工河川の堤防作成等、石積技術は高度な堰堤工作に生かされ、浅瀬の海に土盛り、木杭を打ち地盤を固め、石垣で堤防を築いて線路は引かれました。

築堤上を走る様子は、錦絵に描かれ東京の名所に。近年、山手線新駅「高輪ゲートウェイ」とその周辺再開発工事で石垣築堤遺構の発見が話題となりました。現在京急品川駅は2面4線路拡張工事中。

鉄道東海道線は第一京浜国道である東海道と交差している日本初で明治5年(1872)に架けられた跨線橋ですが、現在は新八ツ山橋に移りました。

日本映画史に残る名作『ゴジラ』で、ゴジラが大陸の第一歩を印したのは、この八ツ山陸橋でした。

ご宝号 南無大慈大悲観世音菩薩

荇原神社の天王祭、俗称「かつば祭り」

荇原神社例大祭、六月上旬、南の天王祭。

- ・祭礼日は、本来は6月8日迄でしたが、現在は5月の最終の週末に行われているようです。
- ・この例大祭は江戸時代から続いています。

御神面神輿海中渡御、

荇原神社例大祭最終三日目の御神事です。

- ・現在の天王洲の海から拾い上げられたと伝えられる素戔鳴尊(すさのうのみこと)の神面を、神輿に着けて海上を渡り、豊漁と豊作を祈る。
- ・かつては宿内の海岸から神輿を海に担ぎ入っていたのですが、現在は埋め立てが進み、海岸が遠くなったため、船に神輿を乗せて、港区のお台場海浜公園周辺で行われています。

江戸時代の頃から、若衆が神輿を荒々しく担ぐ際、元結(もとゆい)とい、もとゆい(もとゆい)が水に濡れて切れ、さんばら髪(さんばらかみ)になった様子を観て、誰言うとなく「かつば祭り」と呼ばれるようになったといわれています。

- ・神輿の渡御にもなつて演奏される品川拍子は、大拍子と呼ばれる太鼓と篠笛で演奏されている。
 - ・祭りに先立って品川宿の使者が、現埼玉県三郷市の番匠面(ばんしょうめん)地名(地名)に行き、田植への早苗を頂く稲穂取りの行事が行われる。この稲穂は祭りの際に神輿の鳳凰にくわえさせる。
 - ・祭礼最終日朝 寄木神社神輿に御神面をつけ荇原神社下流 洲崎橋際より船に乗せ、目黒川河口からお台場海浜公園まで運びます。
- 担ぎ手は、各船宿で釣り舟に乗りこみ、目黒川河

口で神社神輿の船を待ち受け、これに続き海浜公園に着くや我先に海に飛び込み神輿を担ぎます。

しながわ昔話、かつば祭り

昔は六月の六日から八日の三日間で荇原神社の天王祭が行われていました。

最後の三ケ日はお神輿が海に入り、かつば祭りとも呼ばれました。荇原神社から海晏寺前迄かついでいったお神輿は、海に入り獵師町であった、現在の東品川一丁目の洲崎の海岸で陸に上がりました。

大正時代以降、品川の海岸線は埋め立てが進み、お神輿が海に入るところが変わっていききました。

この海を渡るお神輿の屋根につけられている御神面には、こんな話が伝わっています。

江戸時代前半、番匠面の村人が舟で洲崎付近を通っていると、波の上にゆらゆら漂う光るものを見つけた。「おや、なんだろう?」。

不思議に思いながら、急いで舟で近づき、海の中から光るものを拾い上げてみると、それは、牛頭天王(すくもてん)素戔鳴尊(すさのうのみこと)によく似た金色のお面でした。

村人は「これはなんともきれいな金びかなお面だ、ありがたいものかもしれない」といって、獵師町の人たちと相談して、現在の荇原神社である貴布祢社(きふね)に納めました。

貴船(きふね)(貴布祢)神社は、現在の荇原神社です。

ある夜、貴布祢社の神主の夢に神様があらわれて、「あの金色の面は、海から拾われたものだから、一年に一度は海中を渡らせるように」と告げると、消

えました。

目が覚めた神主は、「神のお告げにちがいない」と思い、品川の漁師たちを集めて、お神輿の屋根にお面をつけて、威勢のいいお囃子にあわせて

「天王様だ!お神輿だ!ワッショイ!ワッショイ!もーめ!もーめ!」と海の中をかつぎました。

するとどうでしょう。その年は、水の事故もほとんどなく、品川海苔をはじめ、魚や貝が大漁だったのです。このことがあつてから、毎年、豊漁と豊作を祈つて、お神輿が海中を渡るようになりました。

お面の牛頭天王(すくもてん)は水の神様※で、カッパが牛頭天王のお使いだったことや、神輿のかつぎ手がカッパのように見えたことなどから、「かつば祭り」と呼ばれるようになったといわれています。

そして、お面が拾われた所は「天王洲」と名づけられたようです。

今でも、お祭りの始まる前には、番匠面に行き稲の若穂をいただいてお神輿の鳳凰にくわえさせるという「稲穂取り」の行事は、続いています。

また、青物横丁という地名の「青物」は、埼玉県三郷市番匠面の野菜を中川を船で下り荇原神社で商い、帰りは、肥しを積んで帰ったと言う、話が残っています。番匠面は現在の三郷(さんこう)、中川沿いです

※ 牛の頭の姿故、妃が現れず。山鳩のお告げで、大海に住む沙掲羅(さがる)龍王、八大龍王の娘を娶りに出かけ、三女の頗梨采女(はりさいじよ)を娶り、8年間竜宮で過ごす間に七男一女の八王子をもうけていた。よって牛頭天王(すくもてん)水の神ともいう。 完